

岩手大学大学院生による沿岸支援研修の実践報告

伊藤永乃¹・清水緋夏子¹・武田佑穂¹・田代仁美¹・
山本麻友美¹・吉谷地康平¹・佐々木誠²

¹岩手大学総合科学研究科, ²岩手大学

概要：被災地の長期的支援に関わる臨床心理士育成のための沿岸研修活動を報告する。研修の目的は、持続的な復興支援の基盤づくりとして、臨床心理士を目指す学生に復興の現状や課題を自ら学ぶ機会を設け、臨床心理学的な地域援助の素養を高める事である。今回の研修から、我々は、復興の現状を捉え、そこで暮らす人々の声を聴き、支援の仕方を考える必要性を学んだ。そして、支援を求める人々へどう関わっていくべきかを考えるための機会を得ることができた。

abstract : This is a report on support training for clinical psychology students related to long-term support of coastal disaster-hit areas. The objective of this training is to create a base for sustainable support for reconstruction by setting up opportunities for clinical psychology students to learn the current state and tasks of reconstruction and raise the awareness of regional support. From this training, we could capture the current state of reconstruction, learn the necessity to listen to the voices of people living there and think about how to support. Also, it was an opportunity to think about how to get involved with people needing support.

キーワード：被災地心理支援、臨床心理養成、タッピング・タッチ

1. 目的

岩手大学三陸復興・地域創生推進機構、三陸復興部門心のケア班事業では「被災地の長期的支援に関わる臨床心理士育成のための沿岸研修活動」として、同大総合科学研究科地域創生専攻人間健康科学コース臨床心理学プログラムの学生を対象に被災地での復興に関わる研修および、被災地視察を行っている。その目的は、長期的支援が必要とされる復興の心理支援において、持続的な復興支援の基盤づくりとして、臨床心理士を目指す学生に復興の現状や課題を自ら学ぶ機会を設ける事で、臨床心理学的な地域援助の素養を高める事である。

2. 活動概要

研修活動は 2 日間に渡って行われた。初日は、釜石市にある東日本大震災後の復興支援を推進するために岩手大学が設置した「岩手大学釜石サテライト」にて、学生および担当教員の企画でゼミ形式の研修を行った。2 日目には、陸前高田市にて「あしなが育英会 陸前高田レインボーハウス」を見学と、スタッフの方々による子どもと支援の現状についての説明を受けた。その後、一般社団法人マルゴト陸前高田の企画する「マルゴト復興最前線ツアー」に参加し、陸前高田市の復興状況の視察とガイドによる震災当時の様子について説明を受けた。最後に、社会福祉協議会が開催する被災された方々を対象としたサロンに参加し、その中でタッピング・タッチの実習と、レクリエーションとして歌とゲームによる交流を院生の企画と進行で行った。

3. 活動の経過

①岩手大学釜石サテライト研修

「釜石サテライト」は、被害を受けた岩手県の早期復旧と復興支援を推進するために岩手大学が設置した施設である。今回は施設内の見学及び、災害に関するテーマについてディベートを行うカードゲーム「防災ゲーム クロスロード」¹の

¹ 「クロスロード」はチーム・クロスロードの著作物である。(商願番号 2004-83439 第 28 類)

実施、担当教員による被災地での質問紙調査についての講義を行い、臨床現場での支援活動における現状について考えることができた。

②陸前高田レインボーハウス見学

陸前高田レインボーハウスは、あしなが育英会によって運営されている施設であり、遺児たちが交流できる場となっている。施設は非常に綺麗で開放的な印象であり、生活するための基本的な設備が整っているのはもちろんのこと、親同士が交流するための部屋なども存在し、充実していた。

施設のスタッフの方からは、利用者の様子やレインボーハウスでの活動についてご説明を頂き、遺児という観点からの臨床的支援について学ぶことができた。

③マルゴト陸前高田 復興最前線ツアー

一般社団法人マルゴト陸前高田さんの案内のもと、奇跡の一本松や旧道の駅 TAPIC45（震災遺構）などを見学させていただいた。

ツアーを通して、陸前高田の現在の様子だけではなく、震災前や震災直後、復興の過程についても知る事ができた。市内の至る所で工事が行われており、まさに復興の最中なのだと実感した。また、ガイドの方から被災地域の住人としての目線で体験を聞き、地域内での連携の大切さが実感できた。個々人に対してだけでなく、地域というコミュニティ単位で援助していく、臨床心理学的地域援助の必要性や有効性をより理解できる機会となった。さらに、突然日常を失ってもなお同じ場所で生きていく選択をした方々を心理職としてどのように援助していくか、という視点で考えるきっかけを頂いた。

④お茶っこの会での研修と交流

陸前高田市社会福祉協議会による「お茶っこの会」に参加し、地域の方々とタッピング・タッチの体験と、簡単なゲームも交えたお茶を飲みながらの交流を行った。タッピング・タッチは、指で優しく相手に触れる「タッピング」を基本としたシンプルなケアの手法でその効果は、「不安や緊張が軽減する」、「肯定的感情が高まる」、「信頼やスキンシップが深まる」等、対人援助において役立つとされる。学生と利用者の方々がペアになり、会話をしながらタッピング・タッチを体験していただいた。「マッサージとは違うけれど身体が温かくなってくる感じ」、「血行がよくなりリラックスできる」といった感想を頂いた。さらに、企画してきたゲームや演奏会を交えた交流でも楽しんで頂き、利用者の方々がお茶っこの会を心から楽しみにしていることを伺うことができた。

このことから、同じ地域に住む人々が「お茶っこの会」のような場所に集い、定期的に交流する事で、利用者の心の支えになるだけでなく、人と人のつながりを構築する機能があることを体感した。

4. 考察

東日本大震災から 7 年が経過し、様々な方向から、多様なアプローチによる試行錯誤が成されてきた。人間に支援を行う際、身体的・社会的・心理的支援が必要となるのだが(Engel,1977)、臨床心理士が主に担うのは、心理的支援である。下山(2012)によると、心理士による有効な支援活動には、まず物理的に安全な環境と、医療の整備を行うといった活動と並行して、学校現場や医療スタッフなど、多職種と連携する心理社会的支援システムを、段階的に準備していくことが必要になるという。それぞれの支援を独立的に行うのではなく、様々な立場の人がそれぞれの支援を協働で行う姿勢が求められている。例えば、レインボーハウスの、利用者の方々に対する思いやりがあふれた施設の様子や、心理士をはじめとした様々な職種による利用者への活動の様子から、本当に多くの視点から利用者の事を考えて運営されている、思いのつまった施設であると感じた。

また、地域内の施設での利用者同士の交流は、心理的な支え合いにつながり、互いに助け合える関係性が構築される。つまり、様々な問題への、予防・互助的關係がその地域に生まれる。その関係を構築する「場」を今回の研修で実際に見学して、触れることができた事は、支援の提供の仕方、という事について大いに考えさせられる研修となった。実際に、「お茶っこの会」での交流の際、私たちが用意していった企画を終始笑顔で楽しんでくれたのだが、それは企画というより、利用者の方々同士の仲の良さ、そのコミュニティによるものだと感じた。施設における支援においては、施設職員、臨床心理士、社会福祉士等、様々な業種が活躍することが期待されている。しかし、その活躍が期待される前提として、その「場」は様々な立場の人が交流し、思いがつながる場である。地域に対する援助を行う際、他職種との連携をしていくことも必要であるが、そういった場が求められていることを理解した上で、心理士として支援を行っていかねばならないと感じた。そしてどのように、地域特性を捉え、支援を求める方々へ心理的援助を行っていくか、考えていかねばならない、という気づきが得られた。

今回の研修では、参加者の私たちも様々な立場から「復興」というものの現状を捉えることができた。この復興の現状について、復興最前線ツアーにおける、現地のガイドの方の「ここまで、本当によく復興がはかどった」と言う言葉が、印象的であった。感じ方や捉え方は当然人によって違うのだが、私たちは現状を直接見て、そのうえでそこで暮らす人々の声を聴いて、復興を考える事には大きな意味があると感じた。そして、被災地の方々だけではなく支援を求める人々へ、どう関わっていくべきかを考えるための素晴らしい機会となった研修であった。

引用文献

George L. Engel(1977). The Need for a New Medical Model: A Challenge for Biomedicine. *American Association for the Advancement of Science*, 129-136.

下山晴彦(2012). 災害に対する包括的心理支援システムの構築に向けて. *臨床心理学*, **12**(2), 165-170.

著者紹介

伊藤永乃・清水緋夏子・武田佑穂・田代仁美・山本麻友美・吉谷地康平：岩手大学総合科学研究科
地域創生専攻人間健康科学コース臨床心理学プログラム所属大学院生。
所属学校・機関等住所：〒020-8550 岩手県盛岡市上田 3-18-34



佐々木誠：岩手大学三陸復興・地域創生推進機構特任准教授，専門は臨床心理学（臨床心理士）。2012年より心のケア班の被災地常駐スタッフとして岩手大学釜石サテライトを拠点に研修・カウンセリング・臨床心理士を目指す大学院生への指導を行っている。
所属大学・機関等住所：〒026-0001 岩手県釜石市平田 3-75-1 岩手大学釜石サテライト
E-mail:heart@iwate-u.ac.jp

